

■同時発表先：島根県政記者会、出雲市政記者クラブ、米子市政記者クラブ、
出雲ケーブルビジョン

大型水鳥類の定着と安定的な生息環境確保に向けて、 川の中の拠点を中心とした保全・創出の 方向性について確認します。

～「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる
流域づくり検討協議会 第2回生息環境づくり部会」の開催～

中海・宍道湖圏域はラムサール条約登録湿地に代表される豊かな自然環境を有し、たたら製鉄が行われていた時期から自然と共生を図ってきた地域です。さらに、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類5種（①ハクチョウ類②ガン類③ツル類④コウノトリ⑤トキ）、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ国内唯一の地域です。

中海・宍道湖圏域ではこれらの特色を活かし、経済界、観光、農業、漁業、行政などの多様な機関と連携・協働し、生態系ネットワーク^{*1}の形成による大型水鳥類と共に生きる魅力的な地域づくりを目指し、「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」^{*2}による取り組み^{*3}を進めています。

この度、同協議会の専門部会である「生息環境づくり部会」の第2回目となる会合を以下のとおり開催します。

会合では、大型水鳥類の生息環境確保に向けて、鳥類、水生生物、植物、河川工学の各専門分野の委員が、先行して検討を進めていた出雲地域の川の中における拠点を中心としたエリアでの保全、創出の方向性について確認します。

【開催概要】

- ◆日時：平成28年2月8日（月）14:00～16:00
- ◆場所：宍道湖グリーンパーク ホシザキ野生生物研究所内
会議室
- ◆内容：別紙「議事次第（案）」参照

※1 生態系ネットワークとは…

自然を確保しつつ豊かな自然をつくっていく方法。貴重な自然を保全すると共に、細切れになった自然をつなぎ、生きものの移動経路を確保したり、自然の働きを回復させることによって、豊かな自然を再現しようとする取り組み。

生きものの視点に立ち、土地利用のあり方を考える生態系ネットワークは、生きものを守るための戦略的な方法であると共に、人間が持続的に豊かな生活を送るためのランドデザインの基本となる。

※2 「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」の過去開催結果については別添1のとおり

過去の協議会資料等詳細は出雲河川事務所webサイトに掲載
(<http://www.cgr.mlit.go.jp/izumokasen/iinkai/ryuiki/index.html>)

※3 取り組みの概要については別添2 参考資料参照

<問い合わせ先>

■国土交通省 中国地方整備局 出雲河川事務所

副所長（技） にし ひろゆき 西 博之

【担当】計画課長 すずおき まお 鈴置 真央

0853-20-1761（直通）

斐伊川水系 生態系ネットワークによる
大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

第2回 生息環境づくり部会

議 事 次 第 (案)

日 時：平成28年2月8日(月)

14:00～16:00

場 所：宍道湖グリーンパーク会議室

1. 開 会
2. あいさつ
3. 議事
 - (1) 生態系ネットワークによる保全・整備の拠点(出雲地域)について
 - (2) その他
4. 閉会

第1回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

議事要旨

■日時：平成27年4月28日（火） 14：00～16：00

■場所：ニューウェルシティ出雲所 2階 牡丹

■議事内容

1. 開 会
2. あいさつ
3. 出席者紹介
4. これまでの取組状況について
5. 設立趣旨（案）、規約（案）について
6. 会長の選出
7. 議事
 - （1）取組の背景について
 - （2）指標種の選定について
 - （3）検討体制および今後のスケジュールについて
8. 閉会

■検討協議会風景



■出席委員

構 成	氏 名	団体名等	
専 門 家	生物多様性	涌井 史郎	東京都市大学 教授
	河川	梶川 勇樹	鳥取大学 助教
	鳥類	佐藤 仁志	(公財)日本野鳥の会 理事長
	水生動物	林 成多	(公財)ホシザキグリーン財団 主任研究員
	植物	井上 雅仁	島根県立三瓶自然館サヒメル 課長代理
関係団体	糸原 直彦	出雲商工会議所	専務理事
	岡田 達文	島根県農業協同組合出雲地区本部	副本部長
	小野 篤彦	出雲観光協会	事務局長
	内村 哲也	(一社)出雲青年会議所	副理事長
	片寄 巖	神戸川漁業協同組合	代表理事組合長
	原田 孟	NPO法人いずも朱鷺21	理事長
	青木 広幸	NPO法人国際交流フラワー21	理事長

関係行政機関	野口 武人	出雲市	副市長
	板倉 優		都市建設部長
	舩田 直樹	国土交通省出雲河川事務所	事務所長
	後藤 尊宜	島根県 地域振興部	しまね暮らし推進課 中山間地域支援G
	小林 長利	島根県 環境生活部	自然環境課 自然保護G
	森山 貢		環境政策課 宍道湖・中海対策推進室
	曾田 深志	島根県 農林水産部	農村整備課
	嘉本 美智子		森林整備課 鳥獣対策室
	深田 明	島根県 土木部	河川課神戸川対策スタッフ
事務局	出雲市		
	国土交通省(出雲河川事務所)		

オブザーバー

関係行政機関	澤志 泰正	環境省	野生生物課 課長補佐
	平井 和登	中国四国地方環境事務所	野生生物課 課長補佐

第2回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

議事要旨

■日時：平成27年10月13日（火） 14：00～16：00

■場所：ホテル白鳥 鳳凰

■議事内容

1. 開会
2. あいさつ
3. 出席者紹介
4. 設立趣旨、規約（案）について
5. 議事
 - (1) 取組の背景について
 - (2) 生態系ネットワークの推進に向けて
 - (3) 検討体制および今後のスケジュールについて
6. その他
7. 閉会

■検討協議会風景



■出席委員

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会
出席者名簿

日時：平成27年10月13日（火）14:00～16:00
場所：ホテル白鳥 鳳凰

構成	氏名	団体名等	
専門家	生物多様性	涌井 史郎	東京都市大学 教授
	鳥類	佐藤 仁志	(公財)日本野鳥の会 理事長
	報道	船越 幹洋	(株)山陰中央新報社 地域振興局長
関係団体		古瀬 誠	中海・宍道湖・大山ブロック経済協議会 会長
		谷本 晴美	鳥取西部農業協同組合 代表理事組合長
		影山 善一	鳥根県農業協同組合(代表理事組合長代理) 常務理事
		飯橋 一春	中海・宍道湖観光協会会議 会長
		渡部 巧	中海漁業協同組合 代表理事組合長
		原 俊雄	宍道湖漁業協同組合 代表理事組合長
		片寄 巖	神戸川漁業協同組合 代表理事組合長
		神谷 要	米子水鳥公園 館長
		原田 孟	NPO法人いずも朱鷺21 理事長
		青木 広幸	NPO法人国際交流フラワー21 理事長

関係行政機関	長井 仁志	米子市市民環境部長(米子市長代理)	
	佐々木 史郎	市民生活部長(境港市長代理)	
	松浦 正敬	松江市長	
	長岡 秀人	出雲市長	
	横田 一道	安来市政策企画部長(安来市長代理)	
	舩田 直樹	国土交通省出雲河川事務所	
	吾郷 朋之	鳥取県 生活環境部	水・大気環境課 水環境保全室長
	濱江 謙二		緑豊かな自然課長
	足立 誠	鳥取県 農林水産部	農地・水質保全課
	丸毛 裕治	鳥取県 県土整備部	河川課長
	倉元 秀樹	鳥取県 西部総合事務所	米子県土整備局長
	奥原 徹	鳥根県 地域振興部	しまね暮らし推進課 地域づくり支援グループ グループリーダー
	森山 貢	鳥根県 環境生活部	環境政策課宍道湖・中海対策推進室長
	小林 長利		自然環境課自然保護グループ グループリーダー
	岸田 佳之	鳥根県 農林水産部	農産園芸課 有機農業グループ グループリーダー
	嘉本 美智子		森林整備課鳥獣対策室 企画員
深田 明	鳥根県 土木部	河川課神戸川対策スタッフ 調整監	
事務局	国土交通省(出雲河川事務所)		

オブザーバー

関係行政機関	瀬川 涼	環境省	米子自然環境事務所自然保護官
	丸山 永	中国四国地方環境事務所	松江自然保護官事務所自然保護官
	菅本 次郎	農林水産省 中国四国農政局	農村振興部農村環境課環境保全官

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり

○生態系ネットワークに取り組む目的

私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす自然生態系を守り育て、未来に継承していくためには、生態系ネットワークの形成という考えが重要となる。急激な人口減少・少子化、防災・減災、及び、地球環境問題などといった、全国レベルでも地域レベルでも深刻化する各種課題への対策を効果的に進めるためには、生態系ネットワークの形成による自然生態系の保全・再生は、欠くことができない要素と言える。斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、生態系ネットワークの形成や、自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域となっている。

- ・数十年は避けられない、全国レベルの人口減少
- ・地方から都市部への流出超過、人口の地域的な偏在(ストロー効果)

人口減少しながらも、大都市圏との対流をおこすための「内燃機関」の構築・確保

地域
ブランド
確立

- ・世界に例を見ない超高齢社会への到達
- ・国家間、都市間での人やモノ、情報を巡る競争の激化
- ・まちとしての活力の低下の懸念

おとずれてみたい、住んでみたい、
持続可能なまちづくり

観光振興

生態系
ネットワーク形成

防災減災の
推進

- ・良好な自然環境の喪失による、生物多様性の損失
- ・生態系サービスの低下に起因する各種産業の衰退
- ・気候変動の影響等による、農業生産の不確実性増大
- ・新興国の経済発展・人口増に伴う食料等の価格上昇

過去に失われた自然環境の保全・再生と、
その持続可能な利用

地方創生

- ・風水害、土砂災害の頻発・激甚化の懸念
- ・地球温暖化に伴う気候変動によるリスクの増大
- ・都市化・土地の高度利用に伴う社会的脆弱性の増大
- ・防災・減災施設を始めとする社会資本の老朽化

自然環境を活用した土地利用・社会資本整備
(グリーンインフラ)の推進

斐伊川水系を取り巻く自然条件

- ・斐伊川水系は、ラムサール条約登録湿地に象徴される、多くの大型水鳥類が集まる国際的評価の得られた豊かな水辺環境を有している。
- ・特に、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類は、①ハクチョウ類 ②ガン類 ③ツル類 ④コウノトリ ⑤トキの5つに大別されるが、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ地域は、斐伊川水系が国内唯一である。

斐伊川水系を取り巻く社会条件

- ・生態系ネットワークの推進が、国の主要環境政策として位置付けられている。
- ・河川や農地等での関連環境施策の集積が見られ、生態系ネットワーク形成のテーマに基づく官民の広域連携による一体的な活動や事業化を進めるうえでの施設や人材ストックが充実している。
- ・現在、佐渡市のトキや豊岡市のコウノトリ等々、大型水鳥類をシンボルとした地域振興が活発化しているが、斐伊川水系では地域固有の全国や海外にアピール可能な資源価値を有している。

本取組では、国際的に重要な湿地である宍道湖・中海を中核として見据え、大型水鳥類を指標とした、水辺環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立した生態系ネットワークの形成を目指すものとする。

5つの大型水鳥類が生息できる日本で唯一の地域「斐伊川水系」

日本に生息する
希少な大型の水鳥類は、
主に5つにわけられます。

- ① ハクチョウ類
- ② ガン類
- ③ ツル類
- ④ コウノトリ
- ⑤ トキ

斐伊川水系 <ひいかわすいけい> には・・・

- ① ハクチョウ類 ② ガン類 ③ ツル類 …毎年冬に飛来します。
- ④ コウノトリ …飛来もたびたび目撃されています。
- ⑤ トキ …かつて生息していました。



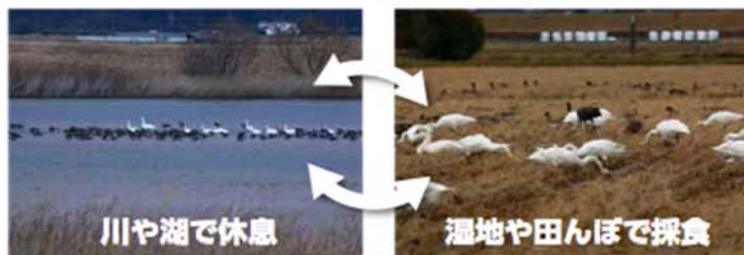
斐伊川水系には日本で唯一、これら5つの大型水鳥類が安定的に生息するポテンシャルがあります。これらの大型水鳥類がくらするように、環境づくりを進めていきます。

国際的に重要な湿地である宍道湖・中海を中核として、
大型水鳥類を指標とした自然環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立した
生態系ネットワークの形成を目指します

大型鳥類を
指標とする
メリット

1 自然と調和した多様な環境が 一体的に存在することの象徴

大型水鳥類の多くは、まとまった良好な水辺を広範囲に移動して生息・繁殖・越冬する習性をもつことから、行政界の枠を越えた広域レベルの水系ネットワークの指標として適した存在です。



川や湖で休息

湿地や田んぼで採食

2 色々な生きものがくらす 環境の象徴

大型のガン類やハクチョウ類、ツル類が生息できる河川・湖沼やまとまりのある湿田や湿地は、小型の水鳥類をはじめ多くの生きものがくらすにける環境条件を有しています。



写真：佐藤仁志（公益財団法人日本野鳥の会）

3 アピール性が高く、 広く受け入れやすい

ハクチョウ類やコウノトリなどの白い鳥、ガン類など群れで行動する鳥は目にとまりやすく、取組の効果をアピールするのに適しています。



今後のとりくみ

中海・宍道湖・大山圏域の経済、観光、農業、漁業、行政、専門家などの多様な主体が集まり、人と大型水鳥類が共生する魅力的な地域づくりにむけた取組を始めています。

生態系ネットワーク形成にむけて

中海・宍道湖・大山圏域の 関係者が集まって話し合う場

人と大型水鳥類がともに暮らす地域づくりの実現と、地域の魅力を引き出すための取組を行います。

大型水鳥類が
くらしやすい
流域を考える場

大型水鳥類がくらしやすいよう、河川・農地などの環境の改善方法をみんなで考えます。

大型水鳥類の
魅力を活かす
仕組みについて
考える場

大型水鳥類が舞う地域の魅力を、農業・観光などの観点からみんなで考えます。



● 農産物のブランド化



● 冬季の観光資源



写真：佐藤 仁志（公財）日本野鳥の会

大型水鳥類の 魅力を 活かす例

● お土産の開発



コウノトリをモチーフにしたお土産など

